

社会複雑性の萌芽と形成

— アマゾニアの民族誌から探る —

池谷 和信*

キーワード

社会複雑性、アマゾニア、モホス平原、土盛り、適応

目次

- I はじめに
- II 完新世時代のアマゾニアと社会複雑性：考古学の視点から
- III 近現代のアマゾニアと社会複雑性：民族誌の視点から
- IV 現在のアマゾニアの社会の動態：集住化と生業複合
 - 1 村の集住化
 - 2 生業複合と狩猟の実際
- V まとめと考察：社会複雑性の萌芽・形成・要因
 - 1 アマゾニアの先史考古学とモホス平原
 - 2 複雑社会の萌芽と環境適応の3類型
 - 3 なぜ、社会複雑性の萌芽が認められないのか：現在のアマゾニア社会の動態

I はじめに

人類の文明形成は、複雑社会や階層社会の形成や都市の誕生などの様々な指標を通して議論されてきた(チャイルド 1951 [1936] ほか多数)。これまでエジプトやメソポタミアやインダスなどの古代文明を対象にした主として考古学の分野から数多くの研究が知られている。例えば、古代メソポタミア文明の形成の過程において、最初の町は、ぬかるんだ平野に埋め込まれた島、広大なデルタ湿地帯の境界線上に位置していたといわれる。町の水路は輸送ルートとして利用されるなど湿地の豊かさが指摘されている(スコット 2019 [2017]: 110)。一方で近年では、マヤやインカを事例として南北アメリカ大陸の文明形成とその展開を対象にした研究も少なくない(関(編) 2017; 青山ほか(編) 2019; 山本 2021)。本稿では、古代文明を直接扱っているわけではないが、人類による社会複雑性の萌芽とその形成過程を把握することを問題意識としてかかげる。

本稿は、従来の研究ではあまり注目されてこなかった南米のアマゾニアに焦点を当てる。アマゾニアは、これまで文明とは遠い国家をつくらない「未開」の地域であるとみなされることが多かった。フランスの人類学者クラストルは、パラグアイのグアヤキ族ほかを対象にして国家に抗する社会として捉えている(クラストル 1989 [1977])。彼は、未開社会は権力や国家を発見していない社会でなく、国家の出現を避けるように構築された社会であると主張する。しかしながら、近年の考古学や関連分野の研究が進むことによって、先史時代のアマゾニアに暮らした人々による社会複雑性(Social Complexity)をめぐる研究が蓄積されつつある(Schaan 2012; Lombardo et al. 2020 ほか)。

さて、これまで人類社会の複雑化の過程を解明するために、主として3つのアプローチがなされてきた。第一は、先史学・考古学の方法である。とくに先史時代におけるメソポタミアや地中海沿岸地域における社会複雑化の起源とその展開を対象にした研究が古

* 国立民族学博物館

くから多い (チャイルド 1951 [1936]; Algaze 2001; Leppard 2019 ほか)。また、中央アジア地域の王国や帝国のように古代文明とは異なり二次的に生まれた国家のなかで社会複雑性を議論することもある (Hanks & Linduff eds. 2010)。さらには、世界の諸文明の形成過程を比較することから社会複雑性の一般的特質を抽出したものもみられる (トリッガー 2019)。

第二は、文化進化論の視点である。この視点の場合、時間軸や空間軸を越えて幾つかの社会を理論的に想定することから社会複雑化について論じるものである。それは、例えば次のような5つの段階に分けられる。①不安定な儀式、②農業の集約化、③ルーティン化された儀礼、④アイデンティティの共有、⑤政体の支配力と交易の拡張という段階を踏んで社会の複雑性の程度が高まることが指摘されている (Whitehouse et al. 2014, 2015)。

第三は、人間の社会が進歩的に発展していくとする考えのもとに社会の進化を論じる方法である。文化人類学における世界各地の民族誌をもとにした進化主義や新進化主義の考え方である。エルマン・サーヴィスは、狩猟採集民、農耕民、牧畜民、都市民などに世界の民族を便宜的に分けそれらを比較することから人類の社会進化の在り方を論議した (Service 1962)。マーシャル・サーリンズは、世界の狩猟採集民の民族誌をふまえて旧石器時代の人々の経済が豊かな社会であることを提示している (Sahlins 1972)。しかしながら、これらの視点は米国の学会では進化人類学の研究グループがみられるように現在でも盛んであるが (Wissener

2002 ほか)、我が国では生態人類学の研究者が現生の狩猟採集民の生計活動や平等主義的行為から人類の初期の姿を推測することに関心を持つこと以外にはあまり重視されていない。

本稿では、人類による社会複雑性の萌芽とその形成過程を明らかにするという問題意識のもとに、アマゾンニアを対象にした考古学の近年の研究を整理した後に民族誌の事例を加えることから社会複雑性を把握するための枠組みを提示することが目的である。はたして民族誌は、考古学の対象とする時間のなかでどのように貢献できるのか否かを考察する。筆者は、アマゾンニアを対象にした最近の考古学の文献の渉猟をする一方でペルーアマゾンの先住民の村における生業複合に関する現地調査を行った。

ここで、筆者の研究枠組みを紹介する。図1は、世界における6大文明と非文明圏を示す。6大文明とは、エジプト、メソポタミア、インダス、中国、そしてメソアメリカとアンデスである。これらは、第一次に生まれた前近代の初期国家である。当時の非文明圏とは、これらの地域以外ということになる。エジプト以外のアフリカ、メソポタミア、インダス、中国以外のユーラシアと日本、オセアニアの全域、そして大部分の南北アメリカ、極北の地域が含まれる。これまで考古学の研究では発掘資料の関係で文明圏を対象にした研究が多かったが、民族考古学的な資料で解釈が有効な非文明圏を設定し両者の関係の在り方を把握するという研究の基礎的枠組みが提示されている (Ikeya 2021 参照)。

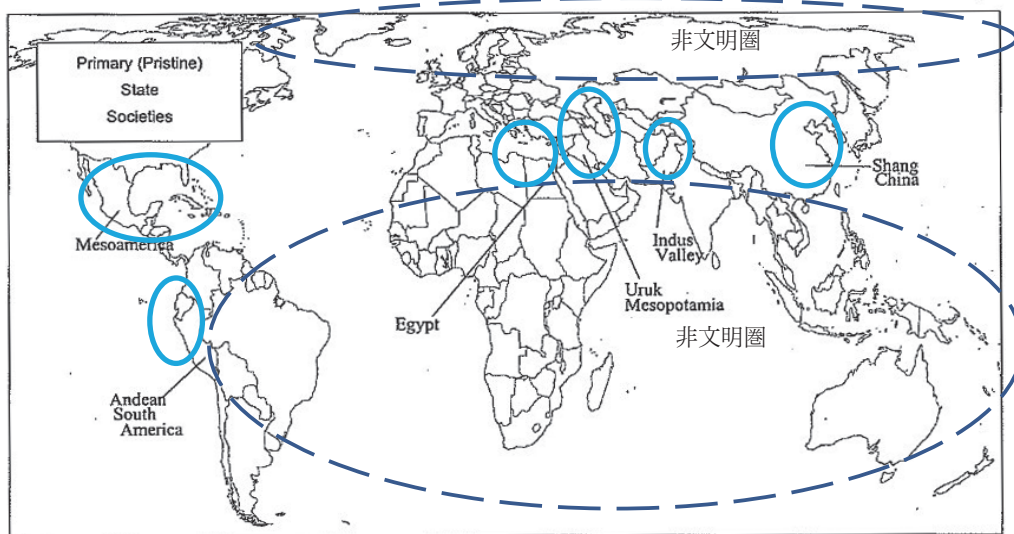


図1 世界における6大文明 (第一次国家) と非文明圏
(出所：筆者作成)

II 完新世時代のアマゾニアと社会複雑性：考古学の視点から

近年、先史時代のアマゾニアを対象にした考古学とその隣接科学の研究が盛んである（実松 2004; 池谷 2016ほか多数）。例えば、アマゾニア南西部・ボリビアのモホス平原（Llanos de Moxos）では、紀元前500年頃に集約的農耕や内水面域を管理することを通して熱帯の景観を変えてきた複雑社会（complex societies）への萌芽がみられた（Lombardo et al. 2010; ほか多数）。そこでは、広範囲にわたる居住ネットワーク、儀礼のための墳丘（マウンド）、土手道、耕作地が広がっていた。一方で、生物地理学や遺伝学の研究によってこの地域はキャッサバ、サツマイモ、野生稻、ピーナッツなどが最初に栽培化された地域の一つとしてみなされている（Lombardo et al. 2020）。

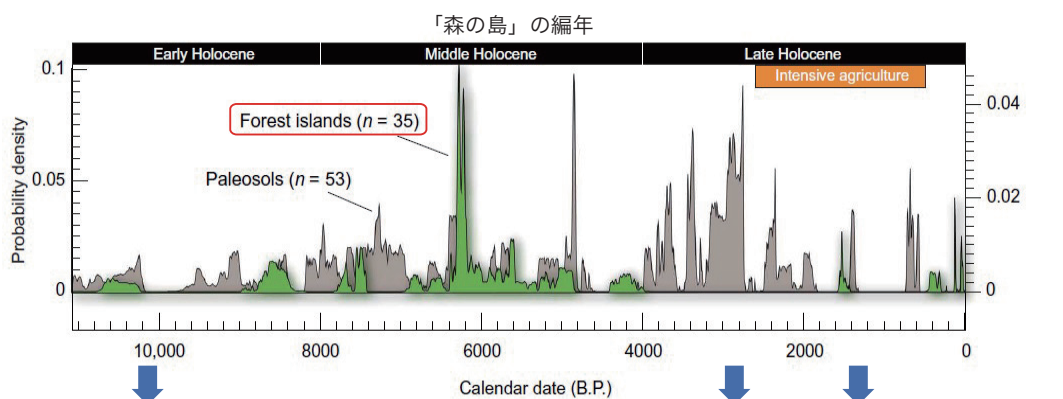
しかしながら、紀元前500年以前からこの地域での社会・環境変容は生じていた。アマゾニア南西部のモホス平原において「森林でおおわれた島」（forest island）では、中期完新世（紀元前6000年頃から紀元前2000年頃の間）に埋葬地や初期の集落跡が示されている（Capriles et al. 2019）。ここには、環境変化に対応できる狩猟採集社会が存在したとされる。後期完新世におけるこの地域の景観は、現在のようなサバンナ草原ではなかったが貝塚がつくられている。「森林でおおわれた島」は、経済的にも象徴的にも重要な最初の土盛り（earthwork）ではないかという仮説が提示されて

いる（Rodrigues et al. 2018）。

ここでの狩猟採集社会については、考古資料に対して1940年代にほぼ同じ地域で調査された現存する狩猟採集民シリオノ族の民族誌資料を利用して解釈されている（Capriles et al. 2019）。当時シリオノは、土地所有者との接触を避けるようにして季節に応じて移動していた。乾期にはシリオノのバンドは、モンキー（新世界ザル類）、ペッカーリーなどの野生動物を追い求めて森のなかに移動した。雨期には川の氾濫にともない森の島の定住性の高いキャンプに移動した。そこでは、キャッサバやトウモロコシの単純な農耕もしばしば行っていた。また、Pomacea 貝のような動物考古資料からその場所は、内水面での水産資源の利用において好都合であることがわかる。

一方で最近の研究では、初期完新世のモホス平原における景観改変では、1万850年前から新たな景観が人によってつくられ、季節的に冠水するサバンナに点在する約4700の人工孤立林（森林の島）となったとされた（Lombardo et al. 2020）。それぞれの孤立林は、およそ横40m、縦20mの大きさである。そして、作物栽培では、1万250年前にカボチャの一種、1万350年前にキャッサバの一種、6850年前にトウモロコシが栽培されていた。その後、後期完新世になって集約的な農耕が開始されたとされる（図2参照）。

さらに、最近の研究では紀元後500～1400年において人工景観の土盛り（マウンド）と漁撈活動の関係が明らかになってきた（Erickson 2000; Prestes-Carneiro et



初期完新世のアマゾン川流域における作物栽培と景観改変。モホス平原、1万2500年前にカボチャの一種、1万350年前にキャッサバの一種、6850年前にトウモロコシが栽培されていた。出所：Lombardo U. et al. 2020

後期完新世の2500年前に集約農耕および管理した淡水漁撈。複雑社会の形成。宗教用マウンド、盛り上げた農地。出所：Capriles et al. 2019

500-1400AD 占有されたマウンド、池でのサバンナ漁撈（Prestes-Carneiro et al. 2019）

17世紀の記録：4千人以上の人がいた。50以上の村に分かれる。

図2 完新世の初期・中期・後期における年代と出来事
（出所：Capriles et al. 2019；6の図に、筆者により出来事を加筆）

al. 2019)。それには動物考古学の研究によってロマ・サルバティエラにおける人々が利用していた20種類以上の魚が同定されている(図3)。同時に、池かスワンプ、あるいは湖か川のようにこれらの魚の生息環境の違いが指摘されている。また、対象地には数百m

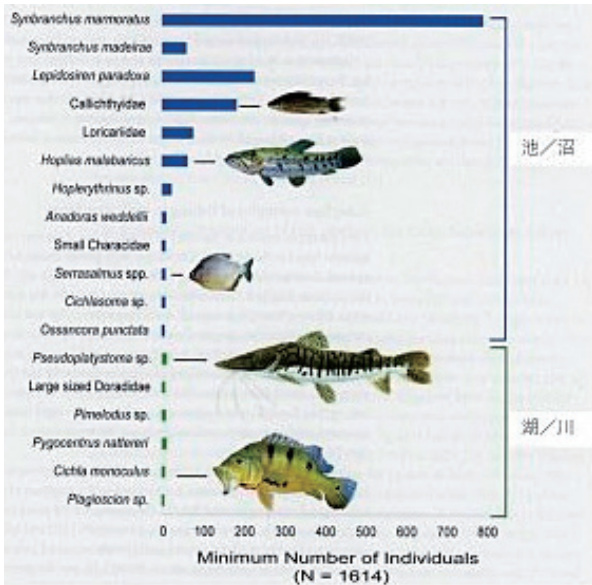


図3 ロマ・サルバティエラで回復された主な魚の生息地
(出所: Prestes-Carneiro et al. 2019)

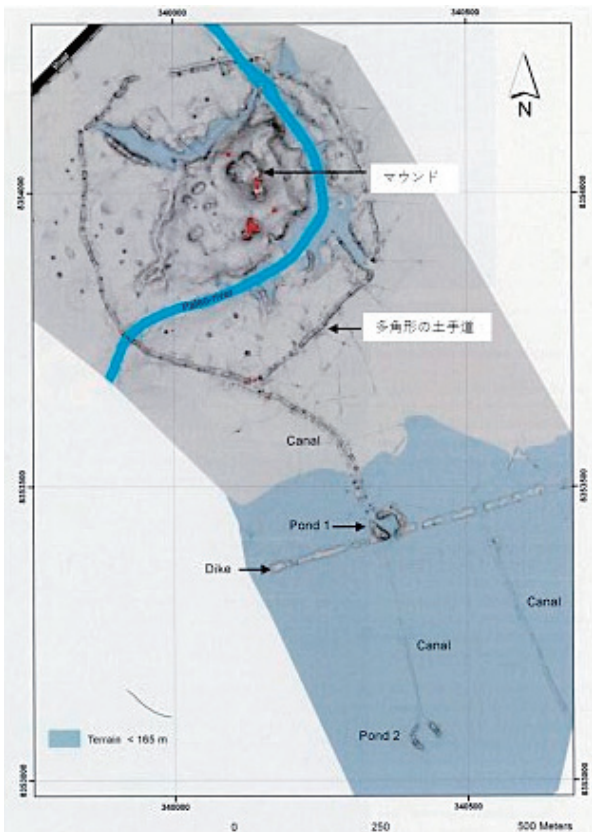


図4 ロマ・サルバティエラにおける土手で構築された運河のネットワーク
(出所: Presres-Carneiro et al. 2019)

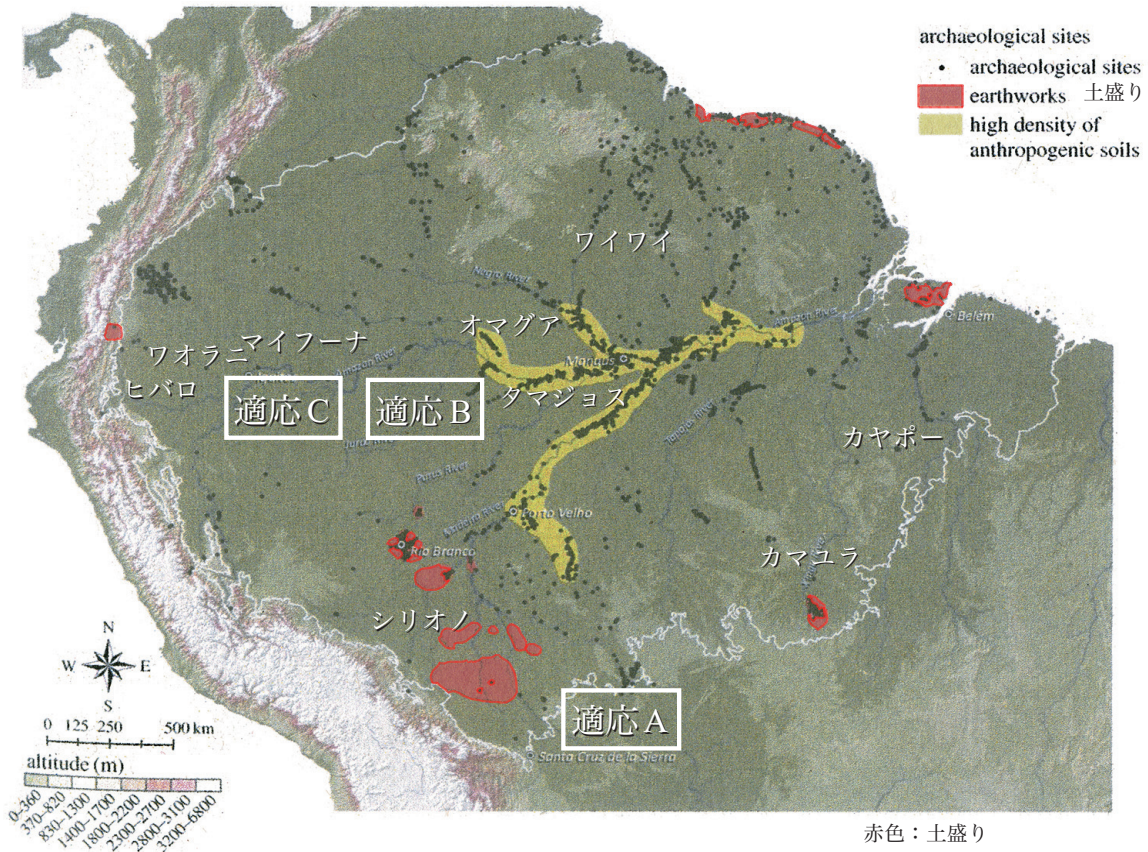
の長さにも及ぶ土手道が人工的につくられていて、周囲が土手からなる池が存在していたことがわかっている(図4参照)。つまり、これらのことから、当時、漁撈活動を容易に進めるために河川域での水の管理がなされていたことがわかる。

以上のように近年の研究によってアマゾニアのなかのモホス平原の事例に限定したものではあるが、完新世の初期から後期にかけて森の島の形成、幾つかの作物の栽培化、そして氾濫原漁撈の順に人為による景観変遷が行われてきたことがわかる。そして、17世紀にはこの地域で50以上の村に分かれて4千人以上が暮らしていたという点は注目すべきである。この地域は、アマゾニアの一部であるが雨期には氾濫するという自然特性を持ちながら完新世の初期は移動性の高い平等社会であったもののトゥモロコシなどの農耕と漁撈を組み合わせる先コロンブス期のなかで社会複雑化の萌芽がみられた所であるとまとめられる。

III 近現代のアマゾニアと社会複雑性：民族誌の視点から

まず、筆者は、近現代の民族誌と先史時代を対象にした考古学の資料を統合して、アマゾニアの社会の地域性をふまえて社会複雑性の程度から多様な環境への適応型として以下のような3類型を提示する。適応A：農耕定住と氾濫原漁撈を組み合わせた複雑社会、適応B：ヴァルゼア(氾濫原、雨期には水没し、乾期に水位が下がって現れる土地)に適応した社会、適応C：テラ・フィルメ(冠水しない台地)に適応した社会である。また、これまでヴァルゼアとテラフィルメの適応は、メガーズによっていわれているが(Megggers 1971)、これに盛土・氾濫原適応を加えたのが筆者の独自な見解である。

さて図5は、アマゾニアの考古遺跡の分布を示す。遺跡は、アマゾン川の流域に多数のものが見出される。とくに中流部に位置するマナオスの近郊には考古遺跡が集中している。同時にここは、人為の関与した土壌の密度が高い地域でもある。また、アマゾニアでは先コロンブス期の土盛り(earthwork)の存在が見つかっている(図5参照)。土盛りは、人工的な景観である可能性が高いが、その役割については議論されてきた。その場所は、アマゾン川の河口に近いベレンの周辺、フランス領ギアナの海岸部、ボリビアアマゾンの地域である。なかでも前節で詳細に言及したボリビアのモ



赤色：土盛り

図5 アマゾニアの考古遺跡の分布と民族の分布

考古遺跡の分布は、Le Tourneau (2019: 81) による。適応A、適応B、適応Cは、筆者による区分を示す。

表1 アマゾンにおける先住民の社会組織、交易、宗教

要素		シリオノ	ワイワイ	ヒバロ	ワオラニ	マイフーナ	カヤポー	カマユラ	オマグア	タパジヨス
		ブラジル	ブラジル	エクアドル	エクアドル	ペルー	ブラジル	ブラジル	ブラジル	ブラジル
定住度	集落の人口	± 80	± 25	± 40	± 30	± 80	150+	± 110	300+	300~2500
	集落の永続度	6ヶ月以下	± 5年	± 6年	± 10	± 10	恒久	± 10年	恒久的	恒久的
社会組織	世帯の長	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	一時的(戦争)			×				×		
	恒久的						×	×		
	村会						×	×		
社会成層	非血縁的アソシエーション						×			
	最高首長								×	×
パートタイムの専門分化	奴隷								×	×
	シャーマン		×	×	×	×	×	×		
フルタイムの専門家	工芸							×		
	最高首長								×	×
	神官								×	×
交易	工芸								×	×
	集落内				×	×		×		
	集落間・部族間		×	×	×	×		×	×	×
特別の建物	公式の市					×		×	×	×
	男子宿泊所						×			
	笛の家							×		
	神殿又は社								×	×
宗教	貯蔵庫又は倉								×	×
	首長の家						×		×	×
	儀式用の柱							×		
宗教	偶像								×	×
	祈祷と供物									×

出所：Meggers (1971), メガーズ (1977) のなかの2つの表を組み合わせた後に、筆者による資料 (ワオラニ、マイフーナ) を追加

ホス平原のものはアマゾニアのなかで面積では最大規模に達する。ここでは、先史時代のモホス平原における社会を「盛土・氾濫原適応」(適応A)と筆者はみなすことにする。

つぎに、アマゾニアにおいて考古遺跡のない地域での人々の暮らしはどのようになっているのだろうか。このことを明らかにするため、アマゾン先住民を対象にした複数の民族誌やエスノヒストリー資料から得られた社会組織、交易、宗教などを比較する。表1は、アメリカの考古学者メガーズが文化生態学の視点から作成したものに筆者による資料を加えたものである(Meggerts 1971; メガーズ 1977 [1971])。まず、対象集団をみてみよう。ブラジル、エクアドル、ペルーのアマゾンにおける9集団の先住民が対象になっている。このなかでシリオノやワオラニは、狩猟採集民としてよく知られている。そのほかはキャッサバを中心に栽培する焼畑農耕民である。つぎに集団の定住度を比較しよう。集落の永続度が6ヵ月以内のシリオノに対してカヤボ、オマグア、タバジヨスでは恒久的なものである。ワイワイやヒバロは、数年で中心の集落が移動する。

さらに、表1から地域社会の比較をみてみよう。オマグアとタバジヨスの場合のみ、最高首長と奴隷がいて人口が大きいことが注目される。オマグアの場合、村ごとに一人の長がいてすべての村は最高首長(大首長)のもとにまとまっていたという。17世紀末のオマグアの最高首長はトゥルルカリと呼ばれていた。それは、神を意味した。そして、森林の民族を襲ったときに捕らえた子供を育てて奴隷としていた(メガーズ 1977 [1971])。

表1からフルタイムの専門職としては神官が存在している点もまた興味深い。但し、シャーマンは上述の2つの民族にはいないが、ほかの6民族には存在する。それに加えて上述の2集落では社や貯蔵庫も存在していて、ほかの諸民族のそれとは大きく異なっている。これらの点から、オマグアとタバジヨスは、対象とした諸民族のなかで社会階層が出現していて社会複雑性の高い社会であると位置づけることができる。

オマグアの生業をみてみよう。主食は有毒キャッサバであり、トウモロコシも重要な食料であった。畑と家屋は、島とか川岸に位置する。すべて低い土地で水をかぶる所であった。ここでは、トウモロコシは家の中や高床の蔵に貯蔵した。キャッサバは、ヴァルゼアのなかで作った穴に水位が下がるまで蓄えていた。魚

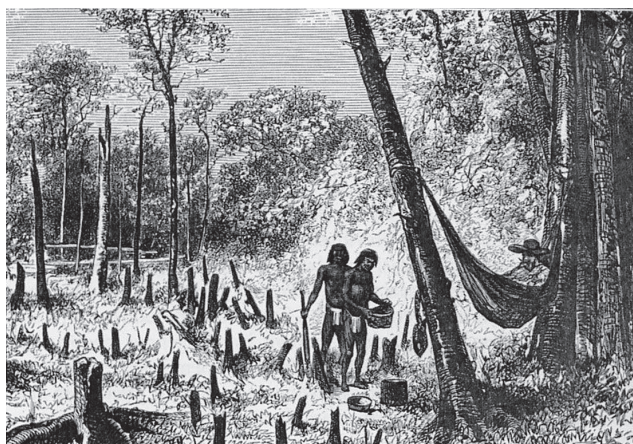


図6 フランス領ギアナの内陸部の焼畑地
(出所: Rostain 2012)

も毎日大量にとれて重要な食料源であった(メガーズ 1977 [1971])。

また、これらの社会は、浸水の度合いは多様であるがアマゾニアのヴァルゼアと呼ばれる氾濫原に位置する点で共通性を持つ。前節で言及した南西部のモホス平原の事例とは農耕と漁撈への従事する点で類似しているが、ヴァルゼアにおいて内水域の水を管理しているわけではない。これは、「ヴァルゼア適応」(図5で適応B)と呼ばれている。図6では、フランス領ギアナの内陸部における川沿いに広がる焼畑農耕の景観を示す。なお、ヴァルゼアの原住民文化は初期のヨーロッパ人の介入が容易であり現在残存することがなく、断片的な情報が得られる程度であることを記しておく(メガーズ 1977 [1971]: 182)。

その一方で2民族以外の社会では、集落の定住度が低くなり世帯の長は存在しているものの最高首長や奴隷のいない社会である。そして、カヤボには首長の家や男子宿泊所は存在するもののほかの社会では特別な建物もない社会である。交易の場合は、集落の内外において行われている。また、これらの社会では内陸部での焼畑農耕に従事している点が共通である。そこでは、主食となるキャッサバを中心にしてバナナなども栽培されている。これは、「テラ・フィルム(冠水しない台地)適応」と呼ばれている(図6参照)。

以上のことから、近現代のアマゾニアを対象にした民族誌からいえることはアマゾニアのなかに氾濫原と内陸の森林環境への2つの適応がみられることである。しかしながら、「盛土・氾濫原適応」(適応A)はみられない。とくにここでは氾濫原適応の社会には定住度が高くなってフルタイムの専門家が生まれている点からも社会複雑性の萌芽が見出せるとまとめられる。

IV 現在のアマゾニアの社会の動態：集住化と生業複合

ここでは、社会複雑性の萌芽が認められないタイプの社会としてアマゾニアの内陸部の事例を紹介する。村の集住化と生業複合という2つの側面からペルーアマゾンの先住民の村をみてみよう。

1 村の集住化

前節では、氾濫原や内陸の森林に応じて適応Aから適応Cまでの3つの形を指摘したが、おのおの社会の動態については特定の地域での現地調査が不可欠である。しかしながら、現在のアマゾニアにおいてすでに言及したように「ヴァルゼア適応」の社会はほとんど消滅している。現存する社会の文化を記述する民族誌研究が可能であるのは、社会複雑性の萌芽が認められない「テラ・フィルメ適応」の適応Cのみである（宮崎 1960ほか）。そこで、ペルー北東部のロレット州内の先住民マイフーナの村での民族資料を提示する。村では焼畑農耕を中心にして狩猟採集漁撈交易を組み合わせた生業複合が社会の特徴である。ここでは、とくに商業的な狩猟活動に注目する。狩猟がアマゾンの現場でどのように行われているのか、社会複雑性の問題とのかかわりはないのか否かを明らかにする。

筆者は、2011年8月（乾期）および2012年1月（雨季）においてのべ約4週間にわたってペルーアマゾンにおいて現地調査を行った。その後も現在（2020年2月）まで数回にわたる短期調査を繰り返している。主な調査地は、ロレット州マサン地区スクサリ（Sucusari）集落である。ここは、ナポ川の支流のスクサリ川沿いに家屋が立地している。また、州の中心地イキトスから船ほかの利用で約7時間を費やす。当時の人口は、122人、23世帯を示す。ここには、先住民のマイフーナ（Maijuna Indian, Orehore Indian, western group of Tucano）とメスチゾの両者が居住するがマイフーナが大多数を占める。

このマイフーナは、もともとスクサリ川の上流部に暮らしていたといわれる。このことは、多数の古老が記憶している。2011年の時点では、中心集落には小学校がある（図7の左下）。そこには数軒の家屋が並んでいた。また当時、多くの世帯は、スクサリ川沿いに集落より上流部に分散して暮らしていた（図7、図8）。しかしながら、2020年2月の現地訪問の際には、大部分の世帯が中心部に移動していた。中心部か

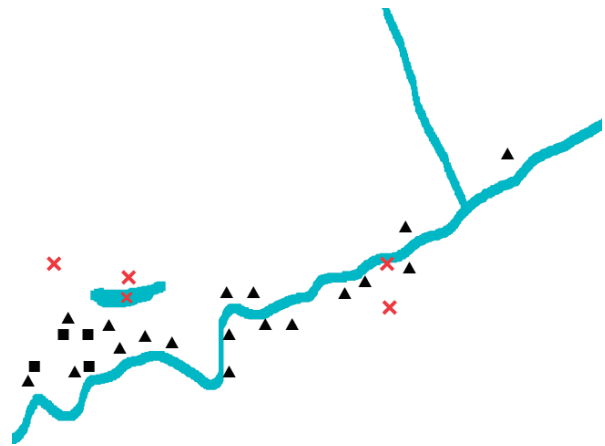


図7 集落の家屋の位置（2010年頃）

▲：家屋 ■：公共物 ×：廃屋

（出所：スクサリ村の資料より筆者作成）



図8 川沿いの家屋 分散して居住 所有物は多くはない

（2020年2月撮影：池谷和信）



図9 川沿いに集住化した中心部

（2020年2月撮影：池谷和信）

ら離れていた家屋は3軒のみであった。その結果、中心部の家屋の密度は高くなっている（図9）。この地区での人口総数の変化は明らかになっていないが、10年余りで村での集住化が起きているとみなされる。はたして集住化によって村の社会は複雑性が高まっているのであろうか。

2 生業複合と狩猟の実際

調査地では、1年間の生業カレンダーのなかで狩猟、採集、焼畑、漁撈を組み合わせた生業に全世帯が従事している。なかでも焼畑農耕は男も女も加わり村の生活の基盤になっている。キャッサバとバナナは、焼畑農耕によって栽培されてから収穫されたものであり、村人にとって現在においても主食である。筆者の観察によると、村では畑に作物をとりに行くことはよくあるが、(前節での適応Aや適応Bとは異なり)作物を貯蔵するという行為はみたことがない。村では貯蔵庫もみられない。また一部の世帯では、2011年では牛やブタの家畜を飼育していたが、現在は一部でブタの飼育が行われているのみである。さらに、自給用の肉の獲得のみならず現金獲得に重要なものがペッカリーを対象にした狩猟である(池谷 2015)。ペッカリーは肉のみならず皮が高価で取引される。

狩猟の担い手としては、調査地の人口は122人、23世帯を示すが、このうち狩猟に集中して従事するのは12人であった。内訳は、マイフーナインディアンが7名、メスチゾが5名である。年齢は21歳から55歳までに分かれ、すべて男性であった。彼らは、一年間にわたり商業狩猟に従事するが、キャッサバやプラタナなどを対象にした焼畑による農耕活動を生計の基盤にしている。4世帯は、4～8頭のブタを飼育する。

狩猟対象動物としては、2種類のペッカリー (collared peccary, white-lipped peccary) のほかに、ウーリーモンキーなどの新世界ザルの類、バク (tapir)、アグーチ (agouti)、パカ (paca)、シカ (deer)、アルマジロ (armadillo)、カピバラ (capybara) などの主に陸上の動物が捕獲されている。河川などの水域ではカイマン (white caiman) やカワウソ (giant otter) が挙げられる。これらには、スペイン語およびマイフーナ語による名称がそれぞれつけられている。

狩猟活動としては、単独の場合と4～5人の集団で行われる場合に分かれる。また、商業的採集(ヤシの一種 chonta) が主な目的であり、狩猟はそのあいまに行われることもある。彼らは、皮の商品価値の高いペッカリーのみを対象にするわけではない。その他の動物もブッシュミートを獲得するために捕獲される。なお、捕獲された5頭のペッカリーの毛皮の大きさを測定したが、長さは102～149cmにおよびまちまちであった。

筆者は、2人のハンターの日帰りの狩猟活動にそれぞれ1回ずつ参与観察することができた。猟は朝の6～7時に出発して11～12時にもどってくるもので、

所要は4～5時間を示す。途中、ペッカリーの好物とされるヤシの果実 (chambira, aguaze, hungurahui など) が落ちて近所でサヒーノ (collared peccary) の足跡やフンを見つけたが、猟には成功していない。森のなかの狩猟には、ショットガンとカマを持ち、つねにハンターの移動する小道が整備される。犬は使用されていない。

ハンターのなかで猟場をめぐるテリトリー化は明瞭にはみられなかったが、ハンターによって得意とする主な猟場が存在した。それぞれは、Sancuduyo 川、Chontilla 川、Catahuayo 川、Tambopata 川などのいずれもスクサリ川の支流になっている。また、獲物を捕獲できた狩猟に関しては5つの事例を得ることができた。いずれもペッカリー類が少なくとも1頭は含まれているが、その他の動物も獲得されている点が特徴である。

以上のように限られた時間内での現地調査によるが、アマゾンの動物資源利用の実際をある程度把握することができた。そこでは必ずしもペッカリーが優先的に狩猟されているわけではないことが明らかになった。ここで、狩猟産物の取引について焦点を当てる。捕獲物の販売としては、ペッカリーの場合は皮と肉、その他の動物では肉のみが主に村外で販売される。肉は燻製にしてキロ当たり6～7ソル (180～210円)、皮は3～10ソルの価格を示す。この価格は、村人にとっては魅力的であるが、狩猟の場合はハンターの思い通りに獲物を獲得できないという問題がある。

一方で、村人のなかではペッカリーの幼獣を飼育する人がいる。育ててから食肉にするという。このことは、狩猟の産物の予測可能性が低いことから狩猟が成功しない場合には他の生業に依存するような柔軟な選択がなされている。この場合も、ペッカリーを家畜化することには成功していない(池谷 2015参照)。村では肉牛を飼育したこともあったが、熱帯林でおおわれている環境下では放牧の問題も加わりうまくいっていない。

以上のようなことから、村での生活基盤となる焼畑においては主食となるキャッサバやバナナが栽培されていて、毎年、焼畑の耕作地が移動することも関与している。村内の世帯間での富の差にはつながっていないことがわかる。また、休閑期間をピファイユヤシ林など果樹園として利用している人がいるが、富の蓄積につながっていない。その一方で、村内での集住化が進行することによって世帯別の家屋の屋根材や規模など

に世帯差が生まれている。これは、トタンか草、家屋の増築などの選択から生まれたものであり富の差から生まれるものではない。

V まとめと考察：社会複雑性の萌芽・形成・要因

本稿は、人類の文明形成を古代文明の形成から捉えて、人類の社会複雑性の萌芽とその形成過程を明らかにすることを研究テーマとした。そこでまず、複雑社会の形成過程を求めるために地域間比較の枠組みとして、農耕や漁撈に注目して、「6大文明と非文明圏の共存」として先史時代の文明を理解する枠組みを提示した。そして、考古学の方法による先史時代のアマゾニアの状況とアマゾニアの民族誌の事例を統合する方法を試みた。その結果は、以下のようにまとめられる。

1 アマゾニアの先史考古学とモホス平原

近年の考古学を中心にすえた学際的研究によって、アマゾニアのなかの南西部に位置するモホス平原の事例ではあるが、完新世の初期から後期にかけての間に、森の島の形成、作物の栽培化、そして氾濫原漁撈の発達など、人為による景観変遷が行われてきたことが明らかにされている。そして、この地域において17世紀には50以上の村に分かれて4千人以上が暮らしていた点は注目すべきである。この地域には、アマゾニアの一部であるが雨期には氾濫する自然特性を持ちながら完新世の初期は移動性の高い平等社会であった一方で、トウモロコシなどの農耕と漁撈を組み合わせることから社会複雑性の萌芽として展開した所があった点が示された。

2 複雑社会の萌芽と環境適応の3類型

近現代の民族誌と先史時代を対象にした考古学の資料を統合して、アマゾニアの社会の地域性をふまえて社会複雑性の程度から多様な環境への適応型として以下のような3類型を提示した。適応A：農耕定住と氾濫原漁撈を組み合わせた複雑社会、適応B：ヴァルゼア（氾濫原）に適応した社会、適応C：テラ・フィルム（冠水しない台地）に適応した社会である。このなかで適応Bは対象とした諸民族のなかで社会階層が出現していて社会複雑性の高い社会であるのに対して、適応Cでは人口総数も小さく定住度も低く社会階層が出現しない。

おそらくこれら3種類の違いが生まれた要因としては、以下の点が挙げられる。まず、自然環境の違いである。適応Cの適応できる地域は、土壌の貧しい内陸部であり、焼畑農耕を中心にして狩猟採集や漁撈などの複数の生業が組み合わされている。食料を貯蔵することをほとんどしない社会である。これに対して適応Bは、川の氾濫によって毎年、豊かな土壌が供給される地域である。食料の保存も行われていて、社会のなかに農民以外の社会層が生まれている。定住度も高く人口規模も大きい。最後の適応Aは、複数の農作物の起源地の可能性が高く、定住農耕に加えて土手や池も作るような漁撈も行われている。ここでの社会階層についての資料は十分ではないが、3つの類型の中でアマゾニアの景観を人為によって最も変えている社会である。

3 なぜ、社会複雑性の萌芽が認められないのか：現在のアマゾニア社会の動態

上述した3種類のなかで社会の動態をみるために、テラ・フィルム（冠水しない台地）に適応した社会の生業複合を主として狩猟活動を通して把握した。そこで、ペルーアマゾンの先住民の村における生業複合のなかで狩猟活動について紹介した。狩猟は、多様な動物を求めて肉の獲得のために行われると同時に、ペッカリーの肉や皮は商品になっていた。しかしながら、狩猟で獲得した獲物が多い人が現金を獲得して社会的に富裕になっているわけではなかった。狩猟の対象とされるペッカリーの獲得の難しさによって安定的な獲物を獲得することは難しい。このため、ペッカリーの家畜化を求める社会の動きもあるが、現時点では家畜化に成功していない。

アマゾニアの焼畑農耕民の生活は、かつては小さい川の上流部に世帯ごとに分散して居住していたが、近年、川の下流部に移動しての定住化・集住化が進行している。同時に、地域の末端に位置づく行政組織の役員になったり農産物の商品化に成功して富を得たりするなど、社会的な階層化の萌芽がみられる傾向にはあるが、現時点では明確な社会階層を示すものを把握することができない。

以上のことから本研究では、アマゾニアを対象にした社会複雑性に関する考古学に関する最新の研究を整理して民族誌資料を加えることから社会複雑性の萌芽と形成を把握した。その結果、アマゾニアの社会複雑性は、農耕定住と氾濫原漁撈を組み合わせた複雑社会

(適応A)、ヴァルゼアに適応した農耕社会(適応B)、テラ・フィルメに適応し狩猟採集や焼畑農耕の社会(適応C)の3つに分類することが可能である。また、適応Cに該当する先住民社会では、社会の定住化・集住化が進行しているが、社会の複雑化にはいたっていない。これらのことから、社会複雑性の形成は、適応Cから適応Aや適応Bのように社会の複雑化が進んだとみなす社会進化的な見方のみならず、アマゾニアの多様な環境においてそれぞれの社会が生態文化的に適応してきたとみなすことができる。

最後に、アマゾニアを対象にして社会複雑化の過程と国家形成を説明するモデルを構築することを検討する。まず、アマゾニアの社会の複雑化の過程は、徐々に程度が変わるものであってA、B、Cのように類型化で示すことは難しいが、本稿は適応Aから適応Cのような社会の多様性から複雑化を考える試みであった。アマゾニアのモデルは、冒頭で提起した筆者による文明圏と非文明圏の2分法が間違っていることを示唆する。おそらく、同じアメリカ大陸においてマヤ諸国家やインカ帝国の支配下に組み込まれていたりいなかったりする人々のなかには、元々適応A、B、Cのような生活と同じではなくとも中心部とは異なる生業に従事する人々がいた可能性がある。問題は、どうしてアマゾニアでは社会の複雑化の程度が大きくならなかったのかという点である。

一方で、パプアニューギニアの内陸部やアフリカ中部のコンゴ盆地などの焼畑農耕社会においても適応Cが多いと推察されるが(杉村 2004; 須田 2021ほか)、アマゾニアの適応Aや適応Bは世界の湿潤熱帯のなかで特異な社会であるのか否かを議論する必要がある。また、定住化や集住化が促進されたとしても社会の複雑化に直ちにむかうものであるのか否かの時間的長さの検討も必要になるであろう。さらに、冒頭で述べたように古代におけるメソポタミア文明の形成の過程において、最初の町の水路は輸送ルート沿いにあるなど湿地の豊かさが指摘されている(スコット 2019 [2017]: 110)。しかしながら、これらの町から国家が形成されたのは2千年後になるといわれる。つまり新石器時代の農業複合体は、国家形成の必要条件ではあっても十分条件ではなかった。古代メソポタミアにおいてどうして社会の複雑化が進んで初期国家が形成されたのだろうか。

本稿は、適応AからCという社会類型から人類の文明形成の問題に対しての枠組みを提示した。同時に、

古代メソポタミアと類似した湿地環境のアマゾニアにおいては社会複雑性の萌芽と展開はあったが初期国家は生まれていないことを示している。湿地環境における社会複雑性の程度の歴史の変遷については今後の課題としたい。

参考文献

(日本語文献)

- 青山 和夫・米延 仁志・坂井 正人・鈴木 紀(編)
2019 『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会。
- 池谷 和信
2015 「野生動物から家畜への道 家畜になったイノシシ、ならなかったペッカーリ：熱帯」『ヒトと動物の関係学会誌』41: 22-26。
2016 「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人」『環境に挑む歴史学』水島司(編)、pp. 43-54、勉誠出版。
- クラストル、ピエール
1989 『国家に抗する社会——政治人類学研究』渡辺公三(訳)、水声社 (Clastres, Pierre 1977 *Society Against the State*. Oxford: Blackwell)。
- 佐藤 靖明・池谷 和信
2020 「人類とバナナ」『ビオストーリー』34: 6-11。
- 実松 克義
2004 『衝撃の古代アマゾン文明——第五の大河文明が世界史を書きかえる』講談社。
- 杉村 和彦
2004 『アフリカ農民の経済——組織原理の地域比較』世界思想社。
- スコット、ジェームズC.
2019 『反穀物の人類史——国家誕生のディープヒストリー』立木勝(訳)、みすず書房 (Scott, James C. 2017 *Against the Grain: a Deep History of the earliest States*. New Haven: Yale University Press)。
- 須田 一弘
2021 『ニューギニアの森から——平等社会の生存戦略』京都大学学術出版会。
- 関 雄二(編)
2017 『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』臨川書店。
- 田村 光平
2020 『文化進化の数理』森北出版。
- チャイルド、ゴードン
1951 『文明の起源 上』瀬津正志(訳)、岩波書店 (Child, Godon 1936 *Man makes himself*. London: Watts & Company)。
- トリッガー、ブルースG
2019 『世界の初期文明』下垣仁志(訳)、同成社 (Trigger Bruce G. 2003 *Understanding early civilizations: a*

- comparative study. Cambridge: Cambridge University Press)。
- 宮崎 信江
 1960 『裸族シャバンテ』社会思想社。
 メガーズ、ベティ・ジェーン
 1977 『アマゾニア——偽りの楽園における人間と文化』大貫良夫 (訳)、社会思想社 (Meggers, Betty Jane 1971 *Amazonia: Man and Culture in a Counterfeit Paradise*. Chicago: Aldine-Atherton)。
- 山本 紀夫
 2021 『高地文明——「もう一つの四大文明」の発見』中央公論新社。
- (英語文献)
- Adams, Robert McC
 2001 Complexity in Archaic States, *Journal of Anthropological Archaeology* 20(3): 345–360.
- Algabe, Guillermo
 2001 Initial Social Complexity in Southwestern Asia: The Mesopotamian Advantage, *Current Anthropology* 42(2): 199–233.
- Ball, Philip
 2015 Complex Societies Evolved without Belief in All-Powerful Deity, *Nature*. <https://doi.org/10.1038/nature.2015.17040>
- Blatrix, Rumsaïs, Bruno Roux, Philippe Béarez, Gabriela Prestes-Carneiro, Marcelo Amaya, Jose Luis Aramayo, Leonor Rodrigues, Umberto Lombardo, Jose Iriarte, Jonas Gregorio de Souza, Mark Robinson, Cyril Bernard, Marc Pouilly, Mélisse Durécu, Carl F. Huchzermeyer, Mashuta Kalebe, Alex Ovando & Doyle McKey
 2018 The unique functioning of a pre-Columbian Amazonian floodplain fishery, *Scientific Reports* 8: 5998 (2018). <https://doi.org/10.1038/s41598-018-24454-4>
- Capriles, José M., Umberto Lombardo, Blaine Maley, Carlos Zuna, Heinz Veit & Douglas J. Kennett
 2019 Persistent Early to Middle Holocene tropical foraging in southwestern Amazonia, *Science Advances* 5(4). <https://www.science.org/doi/10.1126/sciadv.aav5449>
- Daems, Dries
 2019 On Complex Archaeologies: Conceptualizing Social Complexity and its Potential for Archaeology, *Adaptive Behavior* 28(5): 323–328.
- Erickson, Clark L.
 2000 An Artificial Landscape-scale Fishery in the Bolivian Amazon, *Nature* 408: 190–193.
- Hanks, Bryan K. & Katheryn M. Linduff (eds.)
 2009 *Social Complexity in Prehistoric Eurasia: Monuments, Metals and Mobility*. New York: Cambridge University Press.
- Heckenberger, Michael & Eduardo Góes Neves
 2009 Amazonian archaeology, *Annual Review of Anthropology* 38: 251–266.
- Ikeya, Kazunobu
 2021 Ethnoarchaeology of Introducing Agriculture and Social Continuity among Sedentarised Hunter-Gatherers: The Transition from the Jomon to the Yayoi Period, *Quaternary* 4(3): 28. <https://doi.org/10.3390/quat4030028>
- Le Tourneau, François-Michel
 2019 *L'Amazonie, Histoire, Géographie, Environnement*, Paris, CNRS Éditions.
- Leppard, Thomas P.
 2019 Social Complexity and Social Inequality in the Prehistoric Mediterranean, *Current Anthropology* 60(3): 283–308.
- Lombardo, Umberto & Heiko Prümers
 2010 Pre-Columbian Human Occupation Patterns in the Eastern Plains of the Llanos de Moxos, Bolivian Amazonia, *Journal of Archaeological Science* 37(8): 1875–1885.
- Lombardo, Umberto, José Iriarte, Lautaro Hilbert, Javier Ruiz Pérez, José M. Capriles & Heinz Veit
 2020 Early Holocene crop cultivation and landscape modification in Amazonia, *Nature* 581: 190–193.
- Meggers, Betty Jane
 1971 *Amazonia: Man and Culture in a Counterfeit Paradise*. Chicago: Aldine-Atherton.
- Prestes-Carneiro, Gabriela, Philippe Béarez, Myrtle Pearl Shock, Heiko Prümers & Carla Jaimes Betancourt
 2019 Pre-Hispanic fishing practices in interfluvial Amazonia: Zooarchaeological evidence from managed landscapes on the Llanos de Mojos savanna, *PLOS ONE* 14(5): e0214638. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0214638>
- Rodrigues, Leonor, Umberto Lombardo, Seraina Fehr, Frank Preusser & Heinz Veit
 2015 Pre-Columbian Agriculture in the Bolivian Lowlands: Construction History and Management of Raised Fields in Bermeo, *CATENA* 132: 126–138.
- Rodrigues, Leonor, Umberto Lombardo, Elisa Canal Beeby & Heinz Veit
 2017 Linking soil properties and pre-Columbian agricultural strategies in the Bolivian lowlands: The Case of Raised in Fields Exaltación, *Quaternary International* 437: 143–155.
- Rodrigues, Leonor, Umberto Lombardo & Heinz Veit
 2018 Design of pre-Columbian raised fields in the Llanos de Moxos, Bolivian Amazon: Differential adaptations to the local environment?, *Journal of Archaeological Science: Reports* 17: 366–378.

- Rostain, Stéphen
2012 *Islands in the Rainforest: Landscape Management in Pre-Columbian Amazonia*. London: Routledge.
- Rothman, Mitchell S.
2004 Studying the Development of Complex Society: Mesopotamia in the Late Fifth and Fourth Millennia BC, *Journal of Archaeological Research* 12(1): 75–119.
- Sahlins, Marshall
1972 *Stone Age Economics*. London: Routledge.
- Schaan, Denise P.
2012 *Sacred Geographies of Ancient Amazonia: Historical Ecology of Social Complexity*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- Service, Elman Rogers
1962 *Primitive social organization: an evolutionary perspective*. New York: Random House.
- Stein, Gil J.
2001 Understanding Ancient State Societies in the Old World. In *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*. Gary M. Feinman & T. Douglas Price (eds.), pp. 353–380. New York: Kluwer Academic.
- Whitehouse, Harvey, Camilla Mazzucato, Ian Hodder & Quentin D. Atkinson
2014 Modes of religiosity and the evolution of social complexity at Çatalhöyük. In *Religion at Work in a Neolithic Society: Vital Matters*. Ian Hodder (ed.), pp. 134–156. Cambridge: Cambridge University Press.
- Whitehouse, Harvey, Pieter François & Peter Turchin
2015 The Role of Ritual in the Evolution of Social Complexity: Five predictions and a drum roll, *Cliodynamics: The Journal of Quantitative History and Cultural Evolution* 6(2): 199–216.
- Whitney, Bronwen S., Ruth Dickau, Francis E. Mayle, J. Daniel Soto & José Iriarte
2013 Pre-Columbian Landscape Impact and agriculture in the Monumental Mound Region of the Llanos de Moxos, Lowland Bolivia, *Quaternary Research* 80(2): 207–217.
- Whitney, Bronwen S., Ruth Dickau, Francis E. Mayle, John H. Walker, J. Daniel Soto & José Iriarte
2014 Pre-Columbian Raised-field Agriculture and Land Use in the Bolivian Amazon, *The Holocene* 24(2): 231–241.
- Wissener, Polly
2002 The Vines of Complexity: Egalitarian structures and the institutionalization of inequality among the Enga, *Current Anthropology* 43(2): 233–269.